國學院大學日本文化研究所紀要　第七十八輯
（平成八年九月発行）抜刷

学生における宗教および超常現象・神秘現象への関心

井上順孝

学生における宗教および超常現象・神秘現象等への関心

井上順孝

はじめに

「宗教と社会」学会の宗教意識調査プロジェクトでは、一九九五年の四月から六月にかけて、全国三二の大学・専門学校において、四千人以上の学生を対象にしたアンケート調査を行った。調査票のデータ入力、及び集計作業は国学院大学日本文化研究所のプロジェクト「宗教と教育に関する調査研究」との共同作業としてなされた。回答者総数は四、〇五八名、うち有効回答者数は三七七三名であった。[1] ランダム調査ではないので、統計学的な厳密さには欠けるが、この時点での大学生の意識を探る手がかりとしては大きな意味をもつものと考える。また、この調査は一九九二年に「宗教と教育に関する調査研究」が独自に行ったアンケート調査の結果[2]を踏まえてなされたものである。

今回の意識調査プロジェクトは、二三名のメンバーによって実施され、その分析も共同作業で進められているが、

宗教意識調査プロジェクト、および「宗教と教育に関する調査研究」プロジェクトの責任者として、とりあえず調査結果の概要を報告・分析したい。とくに一九九二年の調査（以下、「九二年調査」と略記）の結果との比較を重視することにする。今回の質問項目は全部で二〇であるが、項目によっては、さらに細かな質問が設けられている（具体的な質問内容については本論文の末尾参照）。回答方式はほとんどが選択回答であるが、一部は自由記述である。内容は、①学生及びその家族の宗教への関わりの度合いを調べる部分、②宗教に関連した最近の話題等についての意見を調べた部分、さらに③オカルト、超常現象などへの関心の度合いを調べた部分とに分かれる。質問の順番にそって紹介するのではなく、この①～③の区分けに従って分析していくことにする。[3]

一、宗教への関与

（1） 個人的なレベル

この調査が実施されたのは、ちょうどオウム真理教事件についての報道がピークに達している頃であった。すなわちオウム真理教への強制捜査、麻原彰晃（本名松本智津夫）の逮捕、主だった教団幹部の逮捕などが相次いでいる時期である。したがって、こうした社会状況が、学生たちの宗教に対する距離の取り方やイメージにどう影響したかは大変興味のあるところである。まず、「あなたは宗教にどの程度関心がありますか」という問いで、宗教への関わりを聞いたが、その結果は表1のようになった。

これを男女別に見ると、「信仰をもっている」という回答も「宗教に関心がある」という回答も男性の方が若干数値が高かった。「九二年調査」の結果と比べると、信仰をもっているという割合がだいぶ減少しているのが目立つ。ただし、「九二年調査」では、「信仰をもっている」という選択肢ではなく、「特定の宗教を信じている」とい

表1　宗教への関心

		全体	男性	女性
現在信仰をもっている。	251名	(6.7%)	8.0%	6.0%
信仰はもっていないが、宗教に関心がある	1,289	(34.2)	34.6	33.9
信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない	1,358	(36.0)	34.2	37.0
信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない	840	(22.3)	22.6	22.0
無回答	35	(0.9)	0.6	1.1

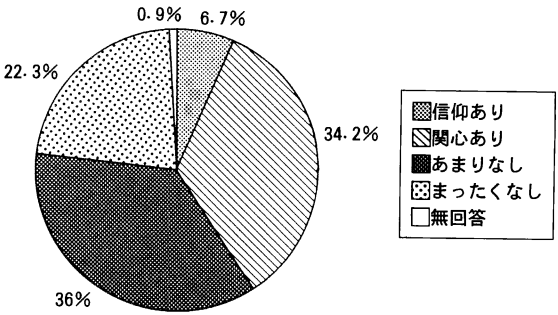

図1　宗教への関心

う選択肢なので、若干ニュアンスが異なるとも言える。けれども、一般的に考えて、「特定の宗教を信じている」という表現の方が、より明確な宗教との関わりを意味していると考えられるので、それを考慮に入れると、今回の調査は数値がかなり低くなったと分析できる。非宗教系大学と宗教系大学と別々に集計して比較してみても、それは確認される。ことに九二年調査の非宗教系大学の回答者の方が、九五年調査の宗教系大学の回答者よりも、信仰をもっている（宗教を信じている）と回答したパーセンテージが高いことは注目される。（表2参照）

このように、宗教を信じていると表明する人の割合は明らかに減少しているが、「信仰はもっていないが、宗教に関心がある」と答えた学生の比率は興味深いものとなっている。「九二年調査」では、宗教に関心があると答えた学生は宗教系の大学（三九・九%）の方が非宗教系の大学（三七・

表2　信仰をもっている(特定の宗教を信じている)人の割合

	宗教系大学	非宗教系大学
92年調査	22.1%	11.2%
95年調査	8.5%	5.6%

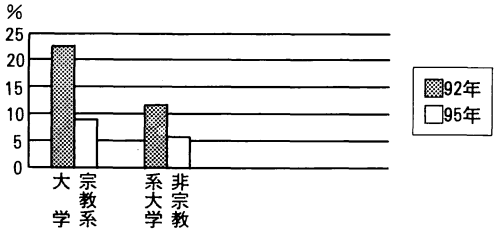

図2　信仰をもっている

六%）よりもわずかながら多かったが、今回はそうではない。宗教系の大学では三二・二%であったのに対し、非宗教系大学では四二・〇%であり、後者の方が一〇%近く多くなっている。

もしここにオウム真理教事件の影響をみるとすると、凶悪な犯罪と宗教が関係をもっていたとする連日の報道のなかで、宗教を信じると表明する人は全体としてだいぶ減ったが、宗教への関心はむしろ高まった可能性があるということである。それが非宗教系の大学で顕著ということも留意すべきであろう。もともと宗教に関わりの薄い人々にとって、一連の事件は宗教への関心を喚起するものであったが、宗教との関わりがあった人々には、複雑な思いを抱かせたかもしれないということである。もっとも、この点については、よりインテンシブな調査による確認が必要である。

信仰をもっている人は具体的には何を信じているのであろうか。現在信仰をもっていると回答した二五一名について、その内訳をみてみる。これは重複回答を認めたが、もっとも多いのは、新宗教で三四・七%、次いで、キリスト教の二二・七%、仏教の二一・九%、神道の一七・一%である。新宗教には、キリスト教系の新宗教も含めてあるが、もっとも多いのは創価学会で四一名である。それでも全体比にすれば、一・一%に過ぎない。創価学会は通常では三%前後の数字がでてくる。学生の間では少ないのか、それとも正直に答えな

かった学生がかなりいるかである。九二年の調査では、非宗教系の大学だけをみても、全体比で三・七％の創価学会の信者がいたので、今回の数値はかなり低いと言わざるをえない。授業時間を使って行うこの種の調査では、創価学会に限らず、新宗教の信者は必ずしも自分の宗教を書かないということが経験的に分かっている。この時期の雰囲気でいっそうこの傾向に拍車がかかったということも考えられる。

では、誰に勧められて宗教を信じるようになるのであろうか。「その宗教を勧めた人は誰ですか」という問いに対し、もっとも多かったのは母親と答えた三三・九％であった。次いで、父の二〇・三％、祖母の一三・一％、祖父の八・三％、街頭で声をかけた人の四・八％、友人の三・六％、布教にきた人の二・〇％である。自分から進んでという人も一一・六％いた。信仰の道にはいるにあたっては、母親の影響が大きいと一般に言われるが、この調査もそれを証明している。また、父より母、祖父より祖母と、女性の側の影響がそれぞれ一・五倍以上である。

なお、自分で信仰をもつ学生でも、他者にそれを勧める事はあまりしないようである。「他人に自分の信仰を勧めたことがあるか」という問いに対しては、七三・七％が「ない」と答えている。数人以上に勧めたことがあるというかなりの積極派は一六名（六・四％）にすぎない。

次に「信仰は持っていないが、宗教に興味がある」と回答した者一、二八九名に対しては、どのような対象に関心を持っているかを聞いたが、その結果は次のとおりである（重複回答）。これを宗教系の大学と非宗教系の大学とで比較しても、さほど大きな違いはないので、一般的な関心のありようが反映されているとみなせる。

テレビを通しての情報に関心が強いのは、現在のメディア状況の反映と考えられるが、当然のことながら、番組内容にも左右される。九二年調査では「ブードゥ教など、世界の珍しい宗教についてのテレビ番組」よりも「超能力に関する民放テレビの特集番組」の方が一・五倍ほど関心を呼んでいる。今回は「宗教教団や世界の宗教などを

表3　関心をもつ対象

95年調査		
聖書や仏教経典などの宗教書	489名	(37.9%)
宗教を扱った小説やノンフィクション	298	(23.1)
宗教教団や世界の宗教などを扱ったテレビ番組	629	(48.8)
神社や仏閣などの宗教施設の見学	429	(33.3)
その他	317	(24.6)

92年調査	
超能力のテレビ番組	31.1%
珍しい宗教のテレビ番組	21.9
雑誌の占いのコーナー	55.5
書店の宗教書コーナー	6.1
キリスト教がテーマの小説	12.4

扱った」というふうに、かなり一般的な言い方をしたが、数値は九二年調査よりずっと高くなった。宗教書の場合も、キリスト教がテーマという限定つきに比べ、一般的な宗教書とすると、倍ちかくになった。「宗教情報」一般についての関心はかなり高いとみなしていいのではないか。

「その他」と答えた者には具体的な内容を書くように指示してあったが、記載された中では、宗教学への関心、宗教自体への関心、オウム真理教への関心などが多いのが目立った。なぜ宗教が存在するのかを知りたいという形での関心が多いことが示されている。各種の宗教情報に接する機会が増えるとともに、宗教に対する知的な関心が強まっている可能性がある。

「信仰は持っていないし、宗教にもあまり関心がない」または「信仰は持っていないし、宗教にも全く関心がない」と回答した者二、一九八名には、その理由を答えてもらった。（重複回答）この回答に関しても、宗教系の大学と非宗教系の大学とでそれほど大きな違いはない。

九二年調査に比べると、必要性のなさ、嫌いという感情を示す割合がだいぶ増えている。全体の数値は表4に示したので、非宗教系の大学だけで比較してみよう。九二年調査では、宗教を信じていない回答者八五八名のうち、

その理由として「自分には必要ない」と答えた者は一六・〇%であり、「宗教には悪いイメージがある」と答えた者は六・八%であった。これに対し、九五年調査では、信仰をもっていない回答者一七四〇名のうち、「宗教の必要性を感じていないから」と答えた者が四六・八%で、「何となく嫌いだから」と答えた者が一三・八%であった。回答の選択肢のニュアンスが若干異なるが、だいたい同趣旨とみなせる。オウム真理教事件で宗教への関心は高まったと言われる時期だが、宗教に対するイメージは悪化している可能性が強い。

（2）家族のレベル

家族の宗教への関わりについては、「家の宗教」があるか、また父母それぞれの個人的信仰があるかどうかを調べた。さらに民俗信仰がどれほど家族単位で行われているかどうかを推測するための質問を設けた。これらへの回答からは日本人の宗教意識を反映するような結果が示された。すなわち、家の宗教があるかという問に対しては、仏教が五五・八%、次いで神道が五・二%、新宗教が三・二%、キリスト教が二・〇%であった。「なし」というのは三一・九%であった。「家の宗教」というレベルでみるなら、仏教が過半数を占めていることが分かる。新宗教が家の宗教という意識をもつ回答者は三%程度でしかない。なお、神道が通常の統計結果よりやや多いのは、国学院大学の回答者二四一名が含まれているからであり、国学院

表4　宗教に関心のない理由

95年調査		
宗教に関する嫌な体験があるから	72名	(3.3%)
何となく嫌いだから	279名	(12.7)
関心がないから	1,239名	(56.4)
宗教の必要性を感じていないから	984名	(44.8)

92年調査	
とくに宗教に接する機会がなかった	23.7%
自分には必要ない	31.9
宗教には悪いイメージがある	13.2
宗教に関する嫌な体験がある	2.6
特に理由はない	47.5

大学を除いた場合、神道の割合は三・四%である。

これに対し、父母の個人的信仰となると、かなり様変わりする。父親の場合信仰をもっているのは七・四%であり、母親の場合は一〇・六%である。そして信仰をもっている父親二八〇名について内訳をみると、仏教が四〇・〇%、新宗教が二三・二%、神道が一七・九%、キリスト教が一二・五%の順となっている。母親四〇一名の内訳は新宗教三二・七%、仏教二八・九%、キリスト教二一・四%、神道八・〇%である。父親と母親の宗教所属の違いが興味深い。父親は仏教が多いのに、母親は新宗教とキリスト教が多い。新宗教の中でも創価学会が約三分の一を占める。

家の宗教ということと、個人の信仰ということに回答者がどのような区別をしているのかは不明であるが、回答結果からは学術的な定義とさほど変わらないことが推測される。

家の宗教として仏教が多いということは、壇家意識のようなものがある程度保持されていることを推測さ

表5　家の宗教（重複回答あり）

神道	196名	(5.2%)	その他	5名	(0.1%)
仏教	2,105	(55.8)	宗教名不明	122	(3.2)
キリスト教	74	(2.0)	なし・無回答	1,243	(32.9)
新宗教	125	(3.3)			

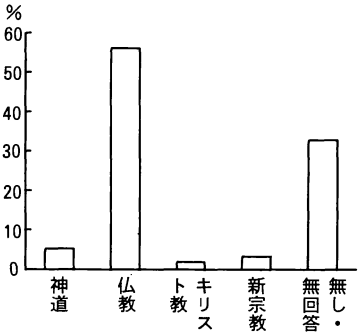

図3　家の宗教

表 6　父の宗教

あり	280名	(7.4%)			
なし	3,419	(90.6)			
無回答	74	(2.0)			
宗教の内訳（重複回答）					
神道	50名	(17.9%)	その他	4名	(1.4%)
仏教	107	(40.0)	宗教名不明	22	(7.9)
キリスト教	31	(2.0)	無回答	8	(2.9)
新宗教	65	(23.2)			

表 7　母の宗教

あり	401名	(10.6%)			
なし	3,329	(88.2)			
無回答	43	(1.1)			
宗教の内訳（重複回答）					
神道	32名	(8.0%)	その他	3名	(0.7%)
仏教	116	(28.9)	宗教名不明	14	(3.5)
キリスト教	86	(21.4)	無回答	7	(1.7)
新宗教	157	(39.2)			

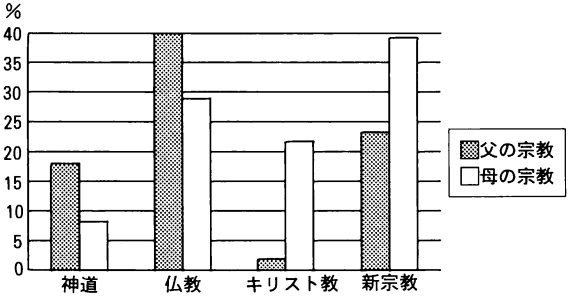

図 4　父母の宗教内訳

せる。回答者本人も、また父母の世代でみても、個人で信仰をもっている割合は通常の調査結果に比べてかなり少ない。この点についても、個人の信仰について回答する場合と似たような傾向を想定する必要がある。つまり、教室で友人と机を並べての調査であるので、身内の宗教について必ずしも正直に報告していないということである。

習俗化した宗教儀礼がどの程度家族単位で行われているかについては、初詣、クリスマス、お盆の墓参りについて調べてみた。集計の結果、生活の形態や出身地域（高校までにもっとも長く住んでいた都道府県）によって、かなり相違の出た項目があったので、東京、神奈川、大阪、兵庫と九州、四国、北海道とを比較できるような表を作ってみた。

初詣に関しては、「あなたの家族は今年の初詣はどうしましたか」と質問したが、全体で、三分の一強が家族で行ったと答えている。これは家族と同居している回答者でも一人暮らしの回答者でもほとんど差がない。初詣が家族そろっての習俗となっている割合がここに示されていると考えていいだろう。また、「自分だけで行った」回答者を合わせると、約半数が初詣をしたことが分かる。日本人の

表8　初詣について

A	家族で行った	1,288名	(34.1%)
B	行った家族もいるが自分は行かなかった	808	(21.4)
C	自分だけで行った	645	(17.1)
D	誰も行かなかった	857	(22.7)
	その他	149	(3.9)
	無回答	26	(0.7)

［地域差］

	東京(368)	神奈川(254)	大阪(268)	兵庫(144)	九州(135)	四国(226)	北海道(188)
A	33.2	33.5	38.4	27.8	37.3	42.5	23.9
B	25.8	27.6	22.0	25.7	14.1	19.0	21.3
C	16.6	15.4	20.9	20.8	13.3	14.6	14.9
D	21.2	20.0	16.0	18.6	27.4	22.1	35.1

五割強が初詣に行くという調査結果はいくつかあるので、初詣を行う割合に関しては、若者の間に急速な変化はあらわれていないと考えられる。地域ごとの差もクリスマスやお盆に比べて小さい。北海道がやや数値が低いのは、歴史的文化的要因の他に、積雪の問題や居住地域の広さという地理的要因なども絡む可能性がある。

次にクリスマスに関しては、「あなたの家族は去年のクリスマスはどうしましたか」と質問したが、家族ではとくに何もしないというのがもっとも多く、約三分の二である。また家族でクリスマスパーティを開いたのは、三割弱である。これは生活形態と若干の関係があり、パーティを開いた人は家族と同居している人の場合は三〇・三%で、一人暮らしであると二三・九%であった。まだこの時期だと帰省していない人もいるだろうから、それを考慮しなければならない。地域ごとの違いをみると、北海道の数値の高さが目立つ。初詣の場合と逆である。家族の儀礼となる割合が高いのは、やはり雪や地理的要因も想定される。すなわち他の地域に比べれば、この時期は若干自由に移動しにくいという条件である。

クリスマスに教会に行くという人はきわめて少数である。キリスト教人口の少なさを考えれば、当然であろう。また、「その他」としては、ケーキを食べただけという回答が圧倒的に多かった。全体として、クリスマス

表 9　クリスマスについて（重複回答）

A	家族でクリスマスパーティーを開いた	1,052名	(27.9%)
B	家族の誰かと教会に行った	11	(0.3)
C	家族では特に何もしなかった	2,438	(64.6)
	その他	67	(1.8)
	無回答	19	(0.5)

［地域差］

	東京(368)	神奈川(254)	大阪(268)	兵庫(144)	九州(135)	四国(226)	北海道(188)
A	31.5	32.3	22.0	22.9	22.2	32.7	42.6
B	0.5	2.4	1.1	1.4	3.0	0.9	1.0
C	63.0	61.0	72.4	67.4	65.2	61.9	48.9

についての一般的イメージと変わるところのない結果である。

これに対し、「あなたの家族は去年のお盆の墓参りはどうしましたか」という問では、お盆という行事が家族にとってもつ意味の大きさが、今でも一定程度あることを示している。家族で行った人は四四・七%であるが、この数値は家族と一緒に住んでいる人の方がだいぶ低い。すなわち親と同居している人の場合は四〇・〇%であり、一人暮らしでは四八・一%であり、寮に住んでいる人だと五六・〇%になる。「行った家族もいるが自分は行かなかった」人も、親と同居している人では三六・

表10　お盆について

A家族で行った	1,688名	(44.7%)
B行った家族もいるが自分は行かなかった	1,311	(34.7)
自分だけで行った	40	(1.1)
C誰も行かなかった	580	(15.4)
その他	124	(3.3)
無回答	30	(0.8)

[地域差]

	東京(368)	神奈川(254)	大阪(268)	兵庫(144)	九州(135)	四国(226)	北海道(188)
A	28.5	30.7	35.1	46.5	57.5	58.4	46.3
B	42.7	38.6	36.2	34.7	24.4	32.7	28.7
C	25.5	25.2	24.6	16.7	11.9	5.3	20.7

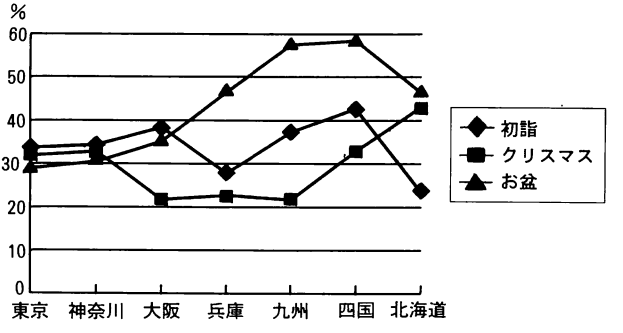

図5　地域差の比較（家族で行った割合）

八％、一人暮らしでは三四・七％、寮に住んでいる人だと二八・九％である。

つまり、いつも離れて暮らしている方が、お盆の行事には参加する度合いが高くなるという傾向がはっきりと出ている。しかし、親と同居というのは都市部が多いと思われるので、出身地域との関係が想定される。そこで東京、神奈川、大阪と九州、四国、北海道を比較してみた。すると表10及び図5で分かるように顕著な違いが出た。家族で行く割合は東京、神奈川、大阪は低く、とくに東京がもっとも低い。これに対し、九州、四国では五割を越えている。一方、誰も行かないという割合は東京、神奈川、大阪はいずれも約四分の一で、九州は約一割、四国では五％強である。お盆との関わりの度合は育った地域によって相当異なることが言えそうである。

(3) 友人レベル

こうした調査では、本人の宗教は語りにくいかもしれないが、友人の宗教についてならもう少し本音がでるかもしれない。そうした可能性を考慮しつつ、「あなたの友だちの中に信仰をもっている人がいますか」という問を設けた。三六・三％が「はい」と答えている。これに関しては男女差が十％ほどあったので、男女別の数値も示しておいた。

友人のなかに信仰をもっている人がいると答えた一、三六九名には、具体的に宗教名を書いてもらった。複数の友人が信仰をもっている場合はもっとも熱心と感じられるものについて答えてもらった。その結果もっとも多いのは新宗教となった。本人の場合に比べて新宗教の割合がかなり多くなっている。その理由としては、自分の信仰は隠しても、友人のことについて書きやすいといったことや、新宗教を信じている友人は記憶に残りやすいといった要因を想定できる。また新宗教の中では創価学会が三三六名と、新宗教の中の過半数を占めている。

表11　友人の信仰

	全体		男性		女性	
はい	1,369名	(36.3%)	381名	(40.1%)	980名	(29.1%)
いいえ	2,373	(62.9)	912	(59.3)	1450	(69.7)
無回答	31	(0.8)	15	(0.7)	16	(1.1)
内訳（重複回答）						
神道	37名	(2.7%)	その他の宗教		3名	(0.2%)
仏教	86	(6.3)	宗教の名前が不明		72	(5.3)
キリスト教	501	(36.6)	無回答		33	(2.4)
新宗教	652	(47.6)				

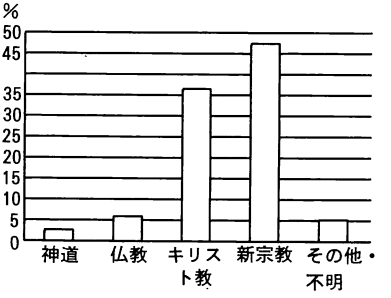

図6　友人の宗教

では、そうした信仰をもつ友人に対しては、どのような態度で接しているであろうか。表12にあるような回答の選択肢を用意したが、四分の三近くが他の友人と変わらない態度で接していると答えている。これについては男女差もあまりない。ただし、これもその宗教によっていくぶん異なると思われるので、回答数の多かったキリスト教の場合と創価学会の場合を比較してみた。やはりいくぶん差が出ている。しかしもともと友人であるので創価学会の場合でも、七割近くは他の友人と変わらない態度という結果となっている。

また、友人の中に信仰をもった人がいない二、三七三名人に対しては、「もしある友人が宗教を信じていると分かったらどうしますか」という問を

表12　その友人への態度

	全体		創価学会	キリスト教
他の友人と変わらない態度で接している	1,007名	(73.6%)	68.5%	84.6%
やや気にしながら接している	132	(9.6)	13.1	5.4
だいぶ気にしながら接している	22	(1.6)	2.7	0.0
その信仰をやめるように勧めている	9	(0.7)	0.9	0.0
その他	42	(3.1)		
無回答	157	(11.5)		

表13　「もしある友人が宗教を信じていると分かったらどうしますか」という問に対して

今までと変わらず接する。	1,198名	(50.5%)
友人が信じている宗教によってはつきあい方を変える	730	(30.8)
その友人とはつきあいをやめる。	19	(0.8)
その他	102	(4.3)
無回答	324	(13.7)

したところ、約半数が今までと変わらず接するとしているが、宗教によってはつきあい方を変えるというのも三割程度いる。これに関しても男女はあまりない。男性の方がいずれにしても意志表明がやや明確であり、女性は無回答がやや多いという程度の差である。

二、宗教に関する意見

(1) 一般的な話題について

宗教についてどういう意見をもつかは、宗教という言葉でその人が何を連想するかによって、かなり左右されると考えられる。したがって、日頃宗教についてどういう考えをもっているかは、ある程度具体的な問題状況を提示し、それについての意見を聞くというのが、一つの方法として考えられる。今回の調査では、宗教に関してよく論じられる事柄を六つ選び、それについての意見を聞くという形式をとった。質問した事柄は次のとおりである。

①「どんなに科学が発達しても宗教は人間に必要だ」

②「宗教でガンなどの難病が治るはずはない」

表14　宗教に関する話題への意見

	＋＋	＋	－	－－	無回答
①科学と宗教	17.3%	36.2	23.8	22.6	0.2
②難病の治癒	52.4	23.9	15.2	8.5	0.1
③宗教家の話	18.5	22.3	24.3	34.8	0.1
④宗教団体の金集め	36.7	40.8	15.2	7.1	0.1
⑤街頭布教	26.5	33.4	25.5	14.5	0.1
⑥心のよりどころ	21.4	38.7	19.3	20.5	0.2

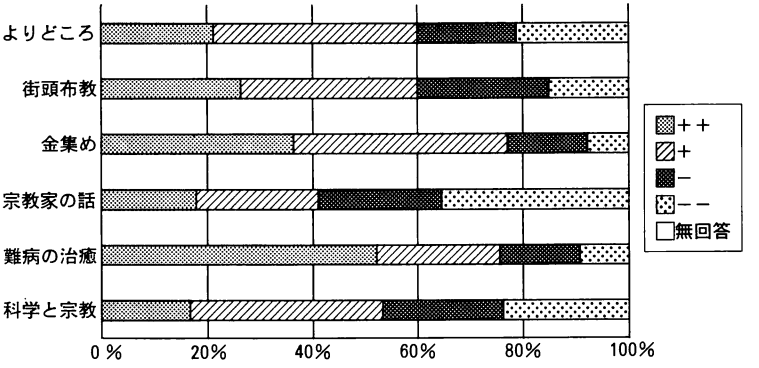

図7　宗教への意見

③「すばらしい宗教家がいたら、話を聞いてみたい」

④「宗教団体はたいてい金集めに熱心だ」

⑤「街頭での布教は迷惑だから、法律によって規制すべきだ」

⑥「宗教を信じると、心のよりどころができる」

いずれも「そう思う」（＋＋）「どちらかといえばそう思う」（＋）「どちらかといえばそう思わない」（－）「そう思わない」（－－）の中から回答するように指示してあった。

「どんなに科学が発達しても宗教は人間に必要だ」という意見に対しては、約半数が肯定的である。若干であるが、男性の方が肯定的である割合が高い。当然のことながら、この意見への回答は自分自身が信仰をもっているかどうか、宗教に関心がある

表15　Aグループと Bグループの比較

	A		B	
	＋＋	＋	＋＋	＋
①科学と宗教	54.3%	30.7%	5.2%	18.8%
②難病の治癒	28.3	28.3	56.3	14.3
③宗教家の話	33.5	17.9	8.6	8.5
④宗教団体の金集め	23.1	30.7	45.1	35.1
⑤街頭布教	25.1	26.7	35.0	32.0
⑥心のよりどころ	47.8	39.4	8.0	24.2

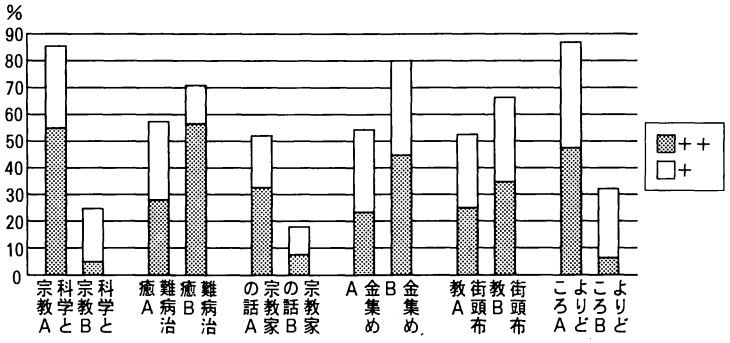

図8　Aグループと Bグループの比較

かどうかと大きな関わりがあると考えられる。そこで、信仰をもっている二五一名（以下、Aグループ）と、信仰をもっていないし、宗教にもまったく関心がない八四〇名（以下、Bグループ）を比較すると、はっきりとした違いが出た。Aグループでは、宗教は人間に必要だと思うのが五四・三%、どちらかといえばそう思うのが三〇・七%で、八五%が肯定的である。これに対し、Bグループでは、それぞれ五・二%、一八・八%で肯定的なのは二四%に過ぎない。

「宗教でガンなどの難病が治るはずはない」という意見にも四分の三が肯定的であり、いわゆる宗教による病気治しには否定的な回答者が大半である。男女差はあまりない。ただここでも、AグループとBグループではだいぶ違いがあり、

Aグループでは、治るはずがないに肯定的な人が約五七％であるのに対し、Bグループでは八四％と高い。

「すばらしい宗教家がいたら、話を聞いてみたい」という考えをもっている人は全体で約四割である。「そう思う」が男性で二五・二％、女性で一四・九％と男性の方が肯定的数値が高い。Bグループでは当然のことながら、肯定的数値は低く、「どちらかといえばそう思う」をいれても一七％に過ぎない。またAグループではやや数値が高く、約五割が肯定的だが、そう思わないという人も三割以上いる。

「宗教団体はたいてい金集めに熱心だ」に対しては、四分の三以上が肯定的で宗教団体のイメージはかなり悪いと言わざるをえない。男性がやや多く、八割にのぼる。Aグループはこの数値もやや低いがそれでも、五割以上がこのように感じていることが分かる。

「街頭での布教は迷惑だから、法律によって規制すべきだ」という意見には、約六割が肯定的である。街頭の布教はよほど迷惑に感じていることが分かる。また、法によってというふうに、公的な力でもって解決しようという発想がけっこう強いことも分かる。この意見には女性の方がわずかながら肯定的な回答者が多かった。Aグループでもこの意見に肯定的な人が五割を越え、信仰をもっている人間でも、街頭布教にはけっこう厳しい目をもっていることが分かる。

「宗教を信じると、心のよりどころができる」には約六割が肯定的な回答をした。男女差はほとんどない。これもAグループとBグループでは対照的で、Aグループは「そう思う」が四七・八％に達し、「どちらかといえばそう思う」を加えると、八七・二％になる。他方、Bグループは「そう思う」が八・〇％、どちらかといえばそう思う」を加えても三二・二％である。当然の結果であろう。

（2）最近の宗教関係の話題に関する意見

宗教に関するもう少し具体的な問題についてはどういう考えをもっているか。これは次の六つの事柄について、意見に賛成、あるいはあてはまるならば○をつけるという形式にした。イエス、ノー形式の回答である。

①統一教会の合同結婚式など法律を作ってでもやめさせるべきだ
②いわゆる霊感商法は、だまされる方が悪い
③桜田淳子や山崎浩子の事件が起こるまで、統一教会については何も知らなかった
④成人した子供の信仰に親が干渉するのはおかしい
⑤新興宗教の報道は批判的なものにかたよっている
⑥皇室を芸能人と同列に扱って報道するのはよくない

まず「統一教会の合同結婚式など法律を作ってでもやめさせるべきだ」という意見には一三・三％が賛成しているが、この数値は街頭布教を法律によって規制すべきだと意見に比べるとそれほど支持されていない。男性の方が三％強賛成が多い。これもAグループとBグループと比較してみたが、この問題に関してはほとんど差がない。オウム真理教事件以前は、テレビは統一教会問題をもっとも頻繁にとりあげていた。批判的な立場からのものが圧倒的に多かったから、それを見ていた人の間では、合同結婚式への反感はだいぶ強くなったと思われる。しかし、これを法的に規制すべきであるとまでは考えていない人が多いことが分かる。

「いわゆる霊感商法は、だまされる方が悪い」という意見に対しては、一九・三

表16　宗教問題への意見

	全体	男性	女性
①統一教会の合同結婚式	13.3%	15.7%	12.1%
②霊感商法	19.3	22.6	17.5
③桜田淳子・山崎浩子	78.3	74.3	80.4
④親の干渉	32.0	39.8	27.7
⑤新興宗教の報道	33.5	39.4	30.4
⑥皇室報道	20.0	25.3	17.1

％が賛成であるが、これも男性の方が五％程度多い。AグループとBグループとでは三％ほどBグループの方が賛成が多い。しかしたいした差ではない。Aグループの賛成も全体より一％ほど高いから、この問題の態度には、自分が信仰をもっているかどうかはあまり関係がないと言えそうである。霊感商法はだまされる側の問題ではなく、だます側の問題として捉えていることが分かる。

「桜田淳子や山崎浩子の事件が起こるまで、統一教会については何も知らなかった」という人は全体で七八・三％にのぼる。これは映像メディアの影響の大きさを如実に物語っている。統一教会の話題は週刊誌などでは一九六〇年代から繰り返されているが、今の若者の知識としては、有名人の合同結婚式騒ぎについてのテレビ報道が源泉であるということが言える。女性の方が六％ほどそうした傾向が強いことが分かる。またAグループは日ごろから宗教に関心があるせいであろうか、六七・七％といくらか低い数値となっている。Bグループは全体とほとんど変わらない。

「成人した子供の信仰に親が干渉するのはおかしい」という意見には、三二・〇％が賛成している。これは男性三九・八％、女性二七・七％とかなり開きがでた。またAグループでは三七・八％、Bグループでは三〇・八％であった。そう大きな違いではない。

「新興宗教の報道は批判的なものにかたよっている」と感じている人は三三・五％。約三分の一である。これも男性が三九・四％、女性が三〇・四％と男性が多い。またAグループ四〇・二％、Bグループ二〇・四％とこれはだいぶ大きな違いとなったが、信仰をもっている人のなかには新宗教関係者もいるから、理解が容易な結果である。

「皇室を芸能人と同列に扱って報道するのはよくない」というのは、直接宗教に関係してはいないが、皇室への距離感を推測するための質問として設けた。この意見に同意したのは、ちょうど二割であった。男性が二五・三％、

女性が一七・一％で、男性の方がこうした報道にいくらか批判的であることが分かる。またAグループは二四・七％、Bグループは一五・一％でAグループの方が少し批判的であるという結果になった。

表17 「散骨・自然葬を知っているか」

	全体		男性		女性	
はい	2,509名	(66.5%)	858名	(65.6%)	1,637名	(66.9%)
いいえ	1,254	(33.2)	444	(33.9)	805	(32.9)
無回答	10	(0.3)	6	(0.5)	4	(0.2)

表18 親の希望に対して

	全体		男性		女性	
はい	1,931名	(77.0%)	671名	(78.2%)	1,247名	(76.2%)
いいえ	546	(21.8)	173	(20.2)	372	(22.7)
無回答	32	(1.3)	14	(1.6)	18	(1.1)

(3) 散骨・自然葬について

やや特殊なテーマであるが、最近話題を呼んでいる散骨・自然葬についての意見を聞いてみた。まずこの言葉を知っているかどうかであるが、約三分の二が知っていると答えた。男女差はほとんどなかったが、大学と専門学校では大きな違いとなり、大学生ではちょうど七割が知っているが、専門学校生では、四六・五％と半数に達しない。専門学校は大半が看護学校であったが、こういう結果であった。

散骨・自然葬について知っている人に対しては、「親が散骨・自然葬を望んだ場合、あなたはそれに従いますか」と聞いたが、その結果七七％は「はい」と答えた。男女差はあまりなかったが、大学と専門学校では差があり、大学生の方がこれを認める傾向にある。すなわち大学生では七八・二％であるのに対し、専門学校生では六六・二％であった。また家の宗教が仏教と答えたものだけを調べてみたが、これも七六・九％で、全体の傾向とほぼ同じである。出身が東京の人間も七五・三％であるので、この問は何かに関係するということなしに、今の学生たちの一般的傾向がこのよ

うなものと考えられる。

では、自分の場合はどうであろうか。「自分が死ぬときのことを考えた場合、散骨・自然葬を望みますか」という問に「はい」と答えたのは、約三割であった。これもわずかながら男性が多いがたいした差ではない。大学生と専門学校生とでは三一・八％と一九・六％と、やはり大学生の方が高い数値である。また家の宗教が仏教という回答者だけを選んでも二九・五％という数値になり、これは全体的傾向と差がない。この問題に対する意識がどう変わるかは、少し長いタイムスパンをとって調査する必要がある。

三、超常現象・神秘現象等についての関心・意見

(1) 超常現象等を信じるか

最近の若者は超常現象を信じやすくなっていると言われる。オウム真理教事件の際も、空中浮揚を一流大学の理工系を卒業した学生が信じていることが話題になった。「九二年調査」でも、いわゆる霊能者の「霊視」などへの関心が相当に高いことが注目された。今回の調査ではオウム真理教事件の影響もあってか、若干数値が低くなっているが、潜在的な関心は依然としてけっこう高いとみた方がよさそうである。

設問は、次の①～⑤について、それぞれ「信じる」(＋＋)、「ありうると思う」(＋)、「あまり信じない」(－)、「否定する」(－－)、「その事柄を知らない」(?) の中から答えてもらった。

①宜保愛子の霊視

表19　散骨・自然葬を望むか

	全体		男性		女性	
はい	766名	(30.5%)	278名	(32.4%)	481名	(29.4%)
いいえ	1,627	(64.8)	542	(63.2)	1,079	(65.9)
無回答	116	(4.6)	38	(4.4)	77	(4.7)

②前田和慧の霊視
③ノストラダムスによる一九九九年の終末予言
④臨死体験
⑤輪廻転生

「九二年調査」と比べると、同じ質問項目であった宜保愛子の霊視とノストラダムスの予言については、いずれも信頼度がぐっと低くなっている。宜保愛子の霊視に対しては、肯定的な答えが前回は五二％であったのが、今回は二六％と半減している。また、ノストラダムスの予言は肯定的な答えが前回は四〇％であったが、これが二四％になっている。宜保愛子に関しては、この間の番組内容も関係するであろうから、オウム事件の影響だけで論じるわけにいはいかない。しかし、超常現象等を無批判に信じ込む傾向に対しては、その火つけ役であっ

表20　超常現象等を信じる割合

	＋＋	＋	－	－－	?	無回答
①宜保愛子	6.2%	19.7%	39.1%	31.8%	3.1%	0.2%
②前田和慧	5.2	12.1	21.0	16.0	45.4	0.2
③ノストラダムス	2.2	22.0	45.2	29.2	1.3	0.1
④臨死体験	21.2	48.1	19.9	8.2	2.7	0.1
⑤輪廻転生	15.3	36.8	28.3	12.6	6.9	0.1

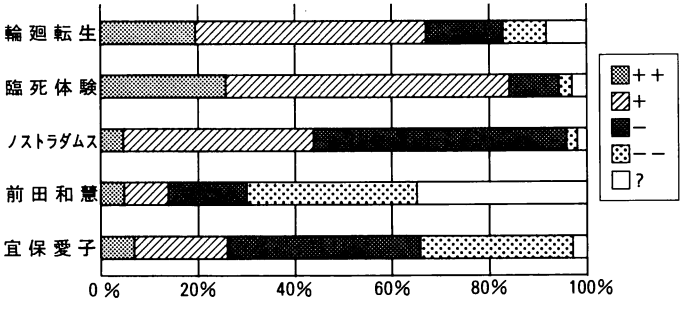

図9　超常現象等を信じる割合

たテレビさえもが、オウム事件以降は、ときにこれを批判する立場を出したりしたので、その影響を考慮しないわけにはいかない。

これに対し、臨死体験や輪廻転生を信ずる割合はけっこう高く、臨死体験で約七割が肯定派、輪廻転生で五割強が肯定派である。興味深いことに、「九二年調査」では死後の世界の存在を信じることに肯定的であった人が約七割であった。死に関わることに対する若者の関心の高さが、この七割程度という数値に示されている。当然このことは若者の宗教行動や意識にいろいろな関わりをもっていると想定すべきである。

(2) 占いについて

超常現象・神秘現象等への若者の関心の高まりは、一九七〇年代半ば以降に注目されることが多くなったが、占いについては、もっと根深いものがある。超常現象などへの関心は七〇年代以降の若者のサブカルチャーの一つとして理解されることが多いが、占いは日本の民俗宗教の重要な構成要因である。したがって民俗宗教的なものが若者の間でどのように受容されているかという点から見るのが適切であろう。

「九二年調査」においては、占いには女性の方が男性よりはるかに強い関心を示すことが如実に示された。これはつねづね言われていることを追認した結果となったが、今回は、次の五種類の占い、もしくはそれに準ずるものを掲げ、それらについて、「かなり当たると思う」(＋＋)、「当たることもあると思う」(＋)、「当たらない」(－)、「関心がないのでどんなことをするのか知らない」(?)の中から答えてもらった。

①生まれ月による星占い

②手相

表21　占いは当たると思うか

	＋＋	＋	－－	?	無回答
①星占い	5.3%	59.8%	31.2%	3.7%	0.1%
②手相	10.7	58.9	24.7	5.7	0.0
③姓名判断	5.6	52.5	35.4	6.5	0.0
④コンピュータ占い	1.7	37.3	52.5	8.5	0.0
⑤血液型	12.2	55.6	29.3	2.9	0.0

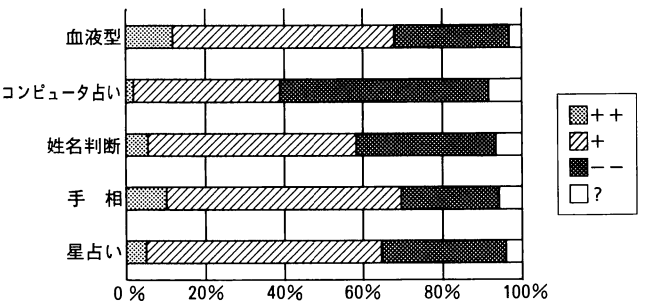

図10　占いの比較

表22　男女比

	全体	男性	女性
①生まれ月による星占い	5.3%	4.0%	6.0%
②手相	10.7	5.5	13.4
③姓名判断	5.6	3.4	6.7
④コンピュータ占い	1.7	1.6	1.8
⑤血液型による性格判断	12.2	10.2	13.3

③姓名判断
④コンピュータ占い
⑤血液型による性格判断

「九二年調査」では星占いを信じるかどうかを聞いたが、今回は五つの占いについて、当たると思うかどうかを聞いた。前回と同じく女性の方が関心が高く、また当たると思っている割合が高いが、その差は前回より小さくなっている。星占いを、信じるかどうかという形で聞くと、「信じている」一八・二%、「ありうる」二五・一%、「疑わしい」二一・三%、「信じていない」三三・三%という結果であった。

今回は当たるかどうかという問であったが、こういう問い方になると、この数値が変化して、「かなり当たる」五・三%、「当たることもある」五九・八%、「当たらない」三一・二%となった。「信じていない」が「当たらない」に相当すると考えられ、その数値はあまり変わらない。つまり三割強が占いに否定的ということである。しかし、肯定的な人の割合は、質問の設定の仕方によって、結果がかなり異なっている。

さてこの五つの占いもしくはそれに準ずるもので比べると、血液型による性格判断がもっとも当たると思っていることが分かる。これは占いとは少し異なるとはいえ、機能的にはかなり占いに近く、その信頼度も手相に近いというのが面白い。生物学的な形質を基準にした占いが、もっとも信頼度が高い結果になった。これに対し、現代テクノロジーを利用したコンピュータ占いがもっとも信頼度が低い。

占いへの関心、信頼度を比較してみると、コンピュータ占いを除いて、いずれも「当たることもあると思う」と答えた人がもっとも多い。その辺りの曖昧な意識が、同時に占いに対するニーズとなっていると考えられる。

(3) その他

一種の新宗教であり、また超常現象に対する関心の対象ともなったのがサイババである。サイババもオウム事件以降、マスコミで紹介されることは滅多になくなったが、一時期は多くのテレビが彼の活動や聖なる灰（ビブティ）を手から突然にまくシーンを放映した。若者は関心をもった時期があるはずである。メディアの影響を確認する意味もあって、サイババについて次の四つの質問をした。

①ビブテイ（聖なる灰）を出すのはインチキだ
②信頼の置けそうな宗教家である
③もし日本に来るなら、ぜひ会ってみたい
④このような人物を信仰する人の気が知れない

「サイババについて知っていますか」という問に対しては、約四分の三が知っていると答えており、また男女差もほとんどない。しかし、その評価に関しては男女差が見てとれる。ビブティを出す行為については、男性の方が明らかに疑っている割合が高い。四割以上がインチキと考えている。信頼性についてはだいぶ低く、六%しか信頼がおけそうとは思ってはいない。ただし、これがオウム真理教事件以前であったら、どういう数値であったろうか。他の質問結果等から類推すると、

表23　サイババについての知識

	全体		男性		女性	
はい	2,810名	(74.5%)	991名	(75.8)	1,807名	(73.9%)
いいえ	958	(25.4)	316	(24.2)	632	(25.8)
無回答	5	(0.1)	1	(0.1)	4	(0.1)

表24　サイババの評価

	全体		男性		女性	
①ビブテイ	944名	(33.6%)	439名	(44.3%)	503名	(27.8%)
②信頼	172	(6.1)	69	(7.0)	103	(5.7)
③会ってみたい	950	(33.8)	289	(29.2)	659	(36.5)
④人物への信仰	624	(22.2)	299	(30.2)	322	(17.8)

これよりは高かった可能性がある。

会ってみたいというのは、約三分の一である。男性の方が低い。最後の質問もあわせて、概して男性の方が厳しい評価をしていることが明らかである。

最後に自己啓発セミナーについての問に関しても、簡単に触れておきたい。自己啓発セミナーは新宗教などとの類似性を指摘する人もあり、最近ブームと言われる「癒し」への願望を吸収している側面がある。では実際には学生たちは、どれほどこうしたものと接しているのだろうか。

全体として自己啓発セミナーにはあまり関わっていないことが分かる。その名すら知らない人が七割以上である。勧誘された経験のある人は五％であり、参加したことがある人は一％に満たない。なお、このうち三人は全コースを終了したと答えている。予想より知られていないという結果となったが、自己啓発セミナーの類にそれと知らずに関わっている可能性もある。また、二五名の参加は少ないけれども、無視すべき数でもない。今後の推移を見守るべきであろう。

表25　自己啓発セミナー

参加したことがある	25名	(0.7%)
勧誘されたことがある	190	(5.0)
聞いたことがある	811	(21.5)
知らない	2,736	(72.5)
無回答	11	(0.3)

まとめ

以上、個々の項目の回答結果について紹介してきたが、今回の結果からどのようなことが言えるか、若干の考察をつけ加えておきたい。

宗教を信じる人の割合は、「九二年調査」よりずっと少なくなり、また通常の社会調査に比べても低いパーセンテージがでたが、これは、調査当時、オウム真理教事件を背景に、意識的、無意識的に宗教と距離をおこうとする

心の動きがあったことを想定させる。また、宗教に対するイメージも若干ながら悪化していることが言えそうである。ただ関心自体は高まっており、これはメディアの影響を想定できる。

筆者はここ二〇年ほどの宗教への関心のあり方を「宗教情報ブーム」[4]と特徴づけてきたが、その観点からすれば、こうした現象はきわめて自然であって、圧倒的にメディア情報に左右された形で、宗教への関心が養成されていくと理解できる。

家の宗教と個人の信仰という区別が明確になっているのも興味深い。家の宗教としては仏教が突出しているが、個人の宗教となると、新宗教が目立ってくる。とくに母親では一番目になる。友人の宗教でもそうで、新宗教の印象はだいぶ強く、中でも創価学会の占める比重が大きい。

民俗宗教に関しては、宗教性のもっとも強いお盆と、習俗あるいは社会的習慣として受け止められている初詣と、もっぱら俗なる年中行事になっているクリスマスとの違いが興味深い。祖先信仰とつながりをもつお盆の行事は、家族の行事という色彩が今でもある程度残っており、かつそれが地域によってだいぶ違うことが分かる。同じ世代の若者でも、やはり育った地域による意識の違いは無視できないわけで、この点もまたいろいろな調査から検討する必要があるだろう。今回の調査からも都市部では民俗宗教に関わる度合いが減っているわけであるから、都市化は伝統的民俗儀礼を衰退させているということを傍証したことになる。

宗教に関しての意見をみると、科学が発達しても宗教は必要だという考えに肯定的な人は五割を越えた。これは宗教は心のよりどころになると考える割合と近い。基本的に宗教の社会的機能に対して否定的なわけではないことが想定される。病気治しへの信頼度は低いが、「ガンなどの難病」という限定つきなので、こうした数値になった可能性がある。

その一方で、宗教団体は金集めに熱心だというイメージはだいぶ強いことが分かる。これも体験というよりメディアの影響が大きいと思われる。宗教には一定の機能を認めても、宗教団体に対するイメージはかなり悪いというのが、この結果からも見えてくる。これは最近の世論調査の動向ともある程度呼応する。

宗教についての知識や印象は、マスメディアを通して得られた情報に大きく左右されていることが、複数の項目の回答結果から分かる。したがって、オカルトや占いなどに関心があっても、具体的にどのような現象が脚光を浴びるかは、そのときどきでかなり変化する可能性があると考えられる。オウム真理教事件以後、オカルトや霊能者番組に批判的な意見が一部に出されたので、オカルトや超常現象を信ずる割合は、「九二年度調査」に比べると明らかに減少したし、ノストラダムスの終末予言を信じる人がだいぶ減った。

その一方で、死や死に関係した事柄への関心は、かなり根強いものがあり、これは最近の一貫した傾向と考えていいだろう。宗教に関わるさまざまな問題の背景に若者のこうした意識のありようが存在することを確認しておくことは非常に重要と思われる。オウム真理教が説いた教義がなぜ若者の関心を引いたのかといった問題を考える際にも、この視点をはずすわけにはいかない。

なお、今回の調査結果は、一九九六年四月から六月にかけて行われた第二回調査の結果と比較されることになる。[5] 大部分の質問項目は九五年のものと重なっているので、昨今の学生の宗教意識についてのより綿密な考察が可能になるであろう。

註

[1]回答者の概要は次のとおりである。

1．回答者数

総回答者	4,058名	
有効回答者	3,773名	(93.0%)

2．回答者の性別

男性	1,308名	(34.7%)
女性	2,446	(64.8)
無回答	19	(0.5)
合計	3,773	

3．回答者の学年

1年生	1,860名	(49.3%)
2年生	1,163	(30.8)
3年生	446	(11.8)
4年生	271	(7.2)
その他	2	(0.1)
無回答	31	(0.8)

4．回答者の生活形態

親と同居	1,991名	(52.8%)
一人暮し	1,236	(32.8)
寮	377	(10.0)
その他	143	(3.8)
無回答	26	(0.7)

5．大学・専門学校の別

大学・短期大学
(以下、大学と表記)
3,214名 (85.2%)

専門学校等
(以下、専門学校と表記)
559 (14.8)

[2]この結果も小冊子として刊行され、また本紀要に二回にわたって分析結果が紹介された。井上順孝「大学生の宗教意識―宗教教育に関するアンケート調査の分析から」(紀要七二)、磯岡哲也「大学生の宗教意識―宗教教育に関するアンケート調査の分析から(二)」(紀要七三)を参照。なお、同プロジェクトは、平成八年度からは「宗教教育の国際比較」プロジェクトとなり、海外の宗教教育との比較に着手している。

[3]なお、各項目の概括的な集計結果は、すでに小冊子として「「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクト第1回アンケート調査報告」(「宗教と社会」学会、一九九五年)として刊行されている。なお、小冊子作成後、数件のデータについて入力ミスが発見されたので、一部の項目の集計では数名の範囲内で小冊子の数値と異なっている個所がある。しかし、パーセントの違いはごくわずかなので、とくにいちいち断っていない。

[4]この語の用法については、拙著『新宗教の解読』(ちくま学芸文庫、一九九六年)の「10情報ブームの時代」を参照。

[5]第二回意識調査の集計結果は、九六年秋にやはり小冊子として「宗教と社会」学会から刊行される予定である。有効回答数は四千三百余である。

参考資料1　プロジェクトメンバー、調査協力者、及び調査対象校

◆宗教意識調査プロジェクトメンバー

井上順孝（国学院大学・プロジェクト責任者）　佐々木裕子（白百合女子大学）
芦田徹郎（甲南女子大学）　鈴木健太郎（東京大学）
磯岡哲也（淑徳大学）　田島忠篤（明の星短期大学）
今泉寿明（可知病院）　永井美紀子（国学院大学）
岩井　洋（関西女学院短期大学）　Carl Becker（京都大学）
Ulrike Wöhr（広島市立大学）　松本由紀子（立川高等看護学院）
薄井篤子（神田外語大学）　三土修平（愛媛大学）
樫尾直樹（東京外国語大学）　森　孝一（同志社大学）
川又俊則（成城大学）　本林靖久（立命館大学）
Robert Kisala（南山大学）　山中　弘（愛知学院大学）
熊田一雄（近畿大学）　弓山達也（日本学術振興会）
櫻井義秀（北海道大学）

◆調査協力者

伊藤幸代（豊橋准看護布学校）　丹治光浩（東海福祉専門学校）
井戸坂智恵（豊橋准看護布学校）　芳賀多豆子（豊橋准看護婦学校）
Richard Szippl（南山大学）　平沢美智子（豊橋准看護婦学校）
島　寛人（平成医療専門学院／豊田学園医療専門学校）　宮庄哲夫（同志社大学）
鈴木朝子（豊橋准看護婦学校）　山田真茂留（東京外国語大学）
鈴木はつ子（豊橋准看護婦学校）

・データ入力

東千尋（東洋英和女学院大学）　北詰裕子（日本女子大学）　佐藤理恵（日本女子大学）

◆調査対象校名（カッコ内は調査した学部・学科等の都道府県名。＊印は宗教系。）

・大学・短期大学

愛知学院大学＊（愛知）
愛媛大学（愛媛）
神田外語大学（千葉）
京都大学（京都）
近畿大学（大阪）
慶応大学（東京）
甲南女子大学（兵庫）
国学院大学＊（東京・神奈川）
淑徳大学＊（千葉）
白百合女子大学＊（東京）
中部大学女子短期大学（愛知）
帝京大学（東京）
東京外国語大学（東京）

・専門学校等

立川高等看護学院（東京）
京都保険衛生専門学校看護学科（京都）
札幌市立高等専門学校（北海道）
東海福祉専門学校（静岡）

同志社大学＊（京都）
東洋英和女学院大学＊（神奈川）
南山大学＊（愛知）
日本女子大学（神奈川）
広島市立大学（広島）
法政大学（東京）
北海道大学（北海道）
北海道教育大学岩見沢校（北海道）
松山大学（愛媛）
酪農学園大学＊（北海道）
立命館大学（京都）
和光大学（東京）

豊田学園医療専門学校（岐阜）
豊橋准看護婦学校（愛知）
平成医療専門学院（岐阜）

参考資料２　質問項目

Ｑ１～Ｑ20の質問の［　　］内に、当てはまる記号、数字、語句等を記入して下さい。番号を選ぶものは○で囲んで下さい。

Ｑ１．あなたの生年　　19［　　］年

Ｑ２．あなたの性別　　1. 男　　2. 女

Ｑ３．高校卒業までの時期で、あなたがもっとも長くいた都道府県名（外国の場合、国名）を記入して下さい。またあちこちに移転したため、どこと言いにくい場合は、「不明」と記入して下さい。

［　　］

Ｑ４．あなたが現在通っている大学、短大、専門学校等の名称、学部・学科（コース）等、及び学年について記入して下さい。

名称［　　］　学部・学科・コース名等［　　］

学年［　　］年

Ｑ５．現在のあなたの生活形態について、次のうちから選んで下さい。

1. 親と同居　　2. 一人暮らし　　3. 寮　　4. その他

Ｑ６．あなたの「家の宗教」がありましたら、「宗教名一覧表」の中から選んで、記号または具体的名称を書いて下さい。２つ以上ある場合は、すべて記入して下さい。

［　　］

Ｑ７．あなたは宗教にどの程度関心がありますか。次のうちから選び、さらにそれぞれの質問に答えて下さい。

1. 現在、信仰をもっている　→SQ7A-SQ7Gに答えて下さい

→SQ7A. あなたが信仰している宗教を宗教名一覧表から選んで下さい。

［　　］

→SQ7B. その宗教には何歳のとき入信しましたか

［　　歳］

→SQ7C. その宗教を勧めた人は誰ですか。次から選んで下さい。

1. 祖父　2. 祖母　3. 父　4. 母　5. 兄弟姉妹　6. 友人　7. 職場の人
8. 布教に来た人　9. 街頭で声をかけた人　10. 自分から進んで
11. その他［具体的に　　］

→SQ7D. あなたはその信仰にどの程度熱心ですか。次から選んで下さい。

1. 熱心である　2. 普通である　3. あまり熱心ではない

→SQ7E. あなたはその宗教が発行している機関誌や新聞などをどの程度読みますか。

1. 毎回読む　2. ときどき読む　3. 読まない　4. そういうものはない

→SQ7F. あなたはその宗教の行事や会合にどの程度出席しますか。

1. たいてい出席　2. ときどき出席　3. まれに出席　4. 出席しない

→SQ7G. あなたは他人に自分の信仰を勧めた事がありますか。

1. ない
2. 2、3人に勧めたことがある
3. 数人から十数人に勧めたことがある
4. 十数人以上に勧めたことがある

2. 信仰はもっていないが、宗教に関心がある　→SQ7Hに答えて下さい

→SQ7H. 次のうち、あなたが関心をもっているものに、すべて○をして下さい。

1. 聖書や仏教経典などの宗教書
2. 宗教を扱った小説やノンフィクション
3. 宗教教団や世界の宗教などを扱ったテレビ番組
4. 神社や仏閣などの宗教施設の見学
5. その他［具体的に　　］

3. 信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない→SQ7Iに答えて下さい

4. 信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない→SQ7Iに答えて下さい

→SQ7I. あなたが宗教に関心があまりない、あるいはまったくない理由を次の中から選んで下さい。(複数に○をしてかまいません)

1. 宗教に関する嫌な体験があるから
2. なんとなく嫌いだから
3. 関心がないから
4. 宗教の必要性を感じていないから

Q 8. あなたのお父さんは個人で信仰をもっていますか。　1. はい　2. いいえ

SQ8. Q8の質問に「1. はい」と回答した人は、その宗教を「宗教名一覧表」から選んで、記号または具体的名称を記入して下さい。

［　　］

Q 9. あなたのお母さんは個人で信仰をもっていますか。　1. はい　2. いいえ

SQ9. Q9の質問に「1. はい」と回答した人は、その宗教を「宗教名一覧表」から選んで、記号または具体的名称を記入して下さい。

［　　］

Q10. あなたの家族は今年の初詣はどうしましたか。次のうちから選んで下さい。

1. 家族で行った　2. 行った家族もいるが自分は行かなかった
3. 自分だけで行った　4. 誰も行かなかった
5. その他［　　］

Q11. あなたの家族は去年のクリスマスはどうしましたか。次のうちから選んで下さい。

1. 家族でクリスマスパーティを開いた　2. 家族の誰かと教会に行った
3. 家族では特に何もしなかった
4. その他［　　］

Q12. あなたの家族は去年のお盆の墓参りはどうしましたか。次のうちから選んで下さい。

1. 家族で行った　2. 行った家族もいるが自分は行かなかった
3. 自分だけで行った　4. 誰も行かなかった
5. その他［　　］

Q13. あなたの友だちの中に、信仰をもっている人がいますか。

1. はい　→SQ13A-SQ13Bに答えて下さい。

→SQ13A. その友人の宗教について宗教名一覧表から選んで下さい。信仰をもっている友達が複数いる場合には、もっとも熱心に信仰している友人の場合について答えてください。

［　　］

→SQ13B. その友人が宗教を信じているということで、あなたの態度は次のどれになりますか。

1. 他の友人と変わらない態度で接している。
2. やや気にしながら接している　3. だいぶ気にしながら接している
4. その信仰をやめるように勧めている
5. その他［具体的に　　］

2. いいえ　→SQ13Cに答えて下さい

→SQ13C. もしある友人が宗教を信じていると分かったらどうしますか。

1. 今までと変わらず接する
2. 友人が信じている宗教によってはつきあい方を変える
3. その友人とはつきあいをやめる
4. その他［具体的に　　］

Q14. 次のような意見について、「1. そう思う　2. どちらかといえばそう思う　3. どちらかといえばそう思わない　4. そう思わない」のいずれかの番号で答えて下さい。

1.「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ。」　[　]
2.「宗教でガンなどの難病が治るはずがない。」　[　]
3.「すばらしい宗教家がいたら、話を聞いてみたい」　[　]
4.「宗教団体はたいてい金集めに熱心だ。」　[　]
5.「街頭での布教は迷惑だから、法律によって規制すべきだ。」　[　]
6.「宗教を信じると、心のよりどころができる。」　[　]

Q15.「自己啓発セミナー」についてあなたは次のどれに当てはまりますか。

1. 参加したことがある　→SQ15Aに答えて下さい。
　→SQ15A. あなたは、次のどれに当てはまるか答えて下さい。
　　1. 全コースを終了した　　2. 現在通っている
　　3. しばらく通ってやめた　　4. すぐやめた
　　SQ15B. SQ15Aの質問に3. または4. を選んだ人は、その理由を簡単に書いて下さい。
　　理由［　　］
2. 勧誘されたことがある
3. 聞いたことがある
4. 知らない

Q16. 次の事柄について、あなたが同意できる意見にすべて○をして下さい。

1. 統一教会の合同結婚式など、法律を作ってでもやめさせるべきだ。
2. いわゆる霊感商法は、だまされる方が悪い。
3. 桜田淳子や山崎浩子の事件が起こるまで、統一教会については何も知らなかった。
4. 成人した子供の信仰に親が干渉するのはおかしい。
5. 新興宗教の報道は批判的なものにかたよっている。
6. 皇室を芸能人と同列に扱って報道するのはよくない。

Q17. 次の事柄について、「1. 信じる　2. ありうると思う　3. あまり信じない　4. 否定する　5. その事柄を知らない」のなかから、番号で答えて下さい。

1. 宜保愛子の霊視　[　]
2. 前田和慧の霊視　[　]
3. ノストラダムスによる1999年の終末予言　[　]
4. 臨死体験　[　]
5. 輪廻転生　[　]

Q18. サイババについて知っていますか。　　1. はい　　2. いいえ

SQ18. Q18の質問に「1. はい」と答えた人は、次の意見のうち同意するものがあったら、それにすべて○をつけて下さい。

1. ビブティ（聖なる灰）を出すのはインチキだ
2. 信頼の置けそうな宗教家である
3. もし日本に来るのなら、ぜひ会ってみたい
4. このような人物を信仰する人の気が知れない

Q19. 散骨・自然葬について知っていますか。

1. はい　　2. いいえ

(Q19 に「1. はい」と答えた人はSQ19AとSQ19Bに答えて下さい。)

SQ19A. 親が散骨・自然葬を望んだ場合、あなたはそれに従いますか。

1. はい　　2. いいえ

SQ19B. 自分が死ぬときのことを考えた場合、散骨・自然葬を望みますか。

1. はい　　2. いいえ

Q20. 次にあげた占いについて「1. かなり当たると思う　2. 当たることもあると思う　3. 当たらない　4. 関心がないのでどんなことをするのか知らない」のなかから、番号で答えて下さい。

1. 生まれ月による星占い　　[　]
2. 手相　　[　]
3. 姓名判断　　[　]
4. コンピュータ占い　　[　]
5. 血液型による性格判断　　[　]